



〈書評〉王雪松『節奏与中国現代詩歌』（中国社会科学出版社 二〇二二年 総三八四頁）

喬，亞寧

(Citation)

未名, 42:37-45

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504950>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504950>



〈書評〉

王雪松『節奏与中国現代詩歌』

(中国社会科学出版社 二〇二二年 総三八四頁)

喬 亜 寧

一、はじめに

五四運動及び白話文運動以降の「新詩」は、生まれて以来その形式について悩みを抱いてきた。中国現代詩、つまり口語の新詩は何によって「詩」となるのか？ この問いは自明なものではない。百年以上にわたる新詩の創作と読解の歴史には、反省すべき集団的無意識が存在する。つまり、新詩には固定された基準がなく、形式的な制約を必要とせず、言語の面では完全に自由だからだ。自由であるからこそ、多くの人が新詩のレベルは非常に低いと誤解している。詩の境界はますます曖昧になり、その結果、新詩の正当性が問われてきた。

このような新詩をめぐる状況を背景に、王雪松の著書『節奏与中国現代詩歌（リズムと中国現代詩歌）』（中国社会科学出版社、二〇二二年）は新詩の「リズム」という要素を取りあげ、その概念や形態などを分析することで新詩の本質をより明確かつ深く見出そうとする。

具体的には、王は詩歌の性質、構造、形態、機能などの観点から、中国現代詩におけるリズムのメカニズムを説明し、中国現代詩の歴史における代表的なリズムに関する詩論と創作実践を取り上げた。本書は理論のまとめ、テ

クストの精読、形態の比較という形で新詩を検討し、分析する。また、中国現代詩のリズムを比較の観点からとらえ、新詩の普及と受容という文脈の中で、国内外の詩歌リズムの伝統の継承と変容を探る。概念論、歴史論、比較論の三つを通して、新詩リズムを現代新詩の普及と受容の文脈に位置づけ、理論体系と解釈の基盤を構築しようとする本書は以下の七章に分かれている。

第一章 現代詩におけるリズムの本質

第二章 現代詩におけるリズムの形式と機能（上）

第三章 現代詩におけるリズムの形式と機能（下）

第四章 自然音節リズム論

第五章 情緒リズム論

第六章 調和リズム論

第七章 比較の視点から見た現代詩のリズム

各章全てについて網羅的な批評を行うのは評者の手に余るため、以下では、評者の関心に従いながら四つの観点から本書の意義を考えてみたい。

二、中国現代詩におけるリズム概念の究明と再考

本書は先行研究を整理した上で、リズムの定義にはさまざまな説が入り交じっていて、統一するのは難しいとす

る。このような状況を踏まえ、著者はまず新詩におけるリズムの概念の解明を目指す。「リズム↓詩のリズム↓中国現代詩のリズム」という三段階を一步步つ進むことで、新詩におけるリズムについて、より統一的な概念体系を確立しようと試みるものである。

まず初めに五四運動以降の近代文学における「リズム」に関連する用語の使用状況を分析したのち、「リズム」という概念は広義では社会生活のあらゆる側面と自然現象に対して一般的に用いられているが、狭義では言語学と詩学の分野で相違点があることが指摘される。

第二段階では、隣接した概念と比較することで「詩のリズム」を定義する。詩のリズムは音楽のリズムと関係しているが、「音楽」を詩の「音楽性」と混同してはならない。詩の「音楽性」の物質的基礎は「音声」であり、しかも詩情（詩の感情）と詩意（詩の気韻）と共生しているために、自由度が高いからだ。詩の朗読はテキストを物理的な声に変換する実践であり、著者は朗読を通じて詩のリズムを分析している。また、音声リズムの他に、視覚的、感情的、生理的、思考的リズムもまた詩のリズムの一部であると述べられる。

第三段階「中国の現代詩のリズム」では、中国語の音節数、押韻、声調（平仄）を挙げてリズムの「中国的」特徴を指し示している。ただ、現代中国語は平仄と押韻の属性をさらに曖昧にし、押韻や対句などの単一なリズム要素を弱めたため、詩は組織構造によって総合的で複雑なリズムの美感を呈しているとされる。

最終的に、本書は中国現代詩のリズムを「現代漢語の詩歌が創作、伝播、受容される過程において、音声、語体、語形、語意、情緒（感情）、生理などの顕著な要素がほぼ規則的に繰り返される言語の感知現象」と定義し、その中心は「緩急型のリズム」（文の中の音節の結びつきの緩急）であるとする。テキストにおける音声リズムと語形リズムは中国現代詩の表層であり（外的リズム）、創作と受容における生理、情緒、語意のリズムは潜在的な刺激と影響

を与える内的リズムであるとなる。

卞之琳は、「リズムは、すなわち一定の時間なされる反復である^(二)」と言う。陳本益によれば、「リズムとは、一定の時間間隔におけるある種の反復である^(三)」。このような理論と比較すると、王雪松は新詩リズムの概念の内包を変えたというわけではなく、主に定義の拡張を行い、リズム理論体系の内部構造を調整したのだと言えるだろう。近代中国の文脈におけるリズムという概念が曖昧で統一されていないことを背景に、本書はリズム概念の柔軟性、そして詩の構造の中の連動性と総合性を強調し、新詩リズムの性質に対する理解を深めている。

周知の通り、新詩の中では平仄、押韻、対句といった形式的要素が弱まっているので、模範となるような格律の規則はなかなか成立しない。強く型にはめられた「格律」は、新詩にとってはすでに「歴史的概念」となったと言える。王雪松の研究は、それまで「格律」によって統制されていた「リズム」を解放し、より詩学的な機能（新詩の構成、批評の役割）を担わせるといふ意義を有していると言えるだろう。

ところで、リズムの原理について、本書は現代の音声学実験と言語学研究成果を基に物理学に近い分析を行い、より科学的かつ客観的にリズムの本質を把握している。これを通じて、著者は詩のリズムを心理的現実を伴う一種の知覚的経験と主張し、それが人間の呼吸リズム、記憶の方式、視覚パターン、聴く習慣と密接に関わっていると論じている。これは、リズムの概念を、音声から視覚、生理、感情、思考へと拡大するために理論的基礎を与えてくれる主張だと言える。

三、中国新詩リズムの「現代的」特徴に対する究明

本書のもう一つの重要な成果は、リズムの形態と機能を見直したことにある。著者は組織構造と外見（主に音節、

音歩、詩行、詩篇に分けられる）、運動形態（突出形態、結合形態、交錯形態、反復形態など）、具体的なリズムの形態（音声リズム、語義リズム、語形リズムなど）という三つの角度から新詩リズムの形態を非常に詳細に分類している。そして新詩におけるリズムの機能について、主に詩的構想に対する影響、詩型の構築と詩の精神の凝集に対する影響、またリズムが美意識を引き起こすメカニズムについて論じており、押韻や重複といった特定のリズム要素がもたらす美的効果についても分析している。

新詩のリズムの形式と機能についての説明に加え、新詩のリズムの「現代的」特徴を明らかにしたことも本書の意義の一つと考えられる。著者の考察によれば、その特徴は以下の三点である。

一点目は、現代中国語が新詩のリズムに与えた影響である。例えば、現代中国語における虚詞の多用は詩のリズム単位の分割に影響を与えて詩の軽重のリズムを強めたし、現代中国語の二重母音化の傾向が、対称あるいは参差の詩行を産んだ。

二点目は、新詩の伝播様式、媒体、形式が新詩のリズムに与えた影響である。近代的な出版・印刷技術に依存することで、新詩は徐々に縦組みから横組みに変換され、改行、近代的な句読点、フォント、フォントサイズなどの視覚的手段を十分に活用して詩の形式を形作るようになった。著者は、それが現代詩のリズムの構成の形、表現様態、そして受容パターンに深く影響していると分析している。

三点目は、古今比較の観点から新詩リズムの古典詩に対する継承と変容を検討するものである。中国語と英語は音節の長短、軽重などの特徴において大きな違いがあるため、英詩のリズム単位である「節」(stanza)、「拍」(beats)、「音歩」(foot)などの概念を完全には新詩に適用することができない。そのため、新詩の研究者たちは古典詩のリズムの規則を積極的に取り入れた。例えば林庚は、古典詩の各詩行は中央の「逗」によって均等に二分される普遍的

規則を有すると認め、新詩もこのような「半逗律」に従うべきだと提唱している。また、卞之琳は古詩の対偶形式から影響を受け、「参差均衡律」という音歩の組み合わせの方法を提案し、新詩の中に古典的リズムの美しさを再現しようとした。ただし、新詩に吸収された古典詩の格律も大きな変化を遂げた。古典詩は音数、平仄、押韻の規則という「律化」の方向に沿って厳格な規則を構築したが、新詩リズムの構築では、音律のリズムがもはや主導的ではなくなり、押韻の規則は簡単、柔軟になった。

リズムの形態について、本書は漢詩の様々な形式的要素、例えば漢字、音節、押韻、改行、句読点、虚詞などを関連させ、詩体系におけるリズムが占める特別な位置を明らかにした。ここから、リズムとは詩歌の視覚、聴覚、意義、感情の接続点として詩歌の形式について多くの要素を統合するが、それによって詩の活力を損われることはないということが窺えるだろう。

四、中国現代詩におけるリズム構築史の再検討

本書は新詩の発展史における代表的なリズム論として、胡適らの「自然音節」論、郭沫若と戴望舒を代表的論者とする「情緒リズム」、新月派の「協和リズム」を取り上げて分析した。こうした過去の理論に対する整理と評価が本書の三つ目の重要な成果であると考えられる。

著者はまず「自然と自由」をキーワードとして、「自然音節」リズム論の代表的主張と創作実践を詳しく分析する。胡適は韻律と平仄の自由、意味と文法の自然を提唱しているが、康白情と俞平伯は主観的感情の表現を重視している。創作面において、「自然音節」リズムの構築には二つのアプローチがあり、一つは音節の実験や対句の運用などを代表とする伝統の改造であるが、もう一つは散文的な語音リズムや欧化の語体リズムなど、西洋を受容する試み

であった。

また、郭沫若と戴望舒の「情緒リズム」論を取り上げ、「詩は感情の自然な起伏をまっすぐに書くものである」という郭の考えと「詩が感情の抑揚を婉曲的に表現するものである」という戴の主張をまとめた。著者は郭沫若と戴望舒が「情緒リズム」を重視し、常に詩の「情緒」即ち詩の内的リズムを最優先に考えているが、詩形、押韻といった外的リズムを排除したわけではないと指摘し、郭と戴のこうした創作活動は詩の内的リズムと外的リズムが互いに影響し合い、互いに制約し合う関係を裏付けていると論じている。

最後に、「協和リズム」論の代表である新月派詩人について表面的な美しい詞藻あるいは律動的な音韻に比べ、彼らが重んじたのは「音節の流れ」と「有機的全体性」という美的追求であることを指摘している。また、新月派詩人が新詩のリズムに与えた二つの貢献についても触れているのは注目に値する。一つは新たな「ルール」を確立し、新たな趣味を育成する美学的な追求であり、もう一つは技術的な面から多くの構想と詩体の実験を提案し、抽象的な詩論を現実の創作として実践したことであった。

新詩史における代表的なリズム概念をまとめた本書を通して、リズム概念の変遷は一種の構造「装置」であり、各時代における詩人や理論家たちの「詩」の本質に対する把握を表していることがわかる。また、模索期の新詩における文言と白話、新と旧、格律と自由の間の緊張感も見ることができ、それは、現代詩におけるリズムの概念や形式は、発見されたり進化を待ったりする既成のものではなく、さまざまな試みによって徐々に構築されてきたものであるという事実を暗示しているのかもしれない。「新詩」に対するさまざまな構想が互いに競争あるいは交渉した結果として、異なる美的傾向や、思考・感覚方式を重んじる新詩特有のリズムが形成されてきたのである。歴史の現場に戻り、早期の現代中国語の詩歌の文脈からリズムの発生を探索することで、共時的な観点から新詩の

発展のさまざまな段階で形成されたリズムの美的空間を切り開き、当時の知識人がどのように新詩の美を形作ったのかを理解することができよう。

五、中国現代詩のリズムを考察する存在論的意義と現実的意義

著者による新詩リズムに関する研究は、現代新詩の創作と批評のための理論体系と解釈基盤を確立する試みであり、一定の実践的意義を持つと言える。新詩の文体に本質的な形を見出そうとするならば、その形は新詩の文体を普遍的に反映するだけでなく、新詩を旧詩や散文から区別することができ、独立性と合理性を獲得させるものでなければならぬだろう。この意味で、新詩の「リズム」を解釈しようとする著者の試みは、新詩誕生以来の「形式上の不安」に対する一種の応答、あるいは突破口と言える。

新詩のリズム体系に関する本書の考察はかなり充実したもののだが、いくつかの部分についてはさらに掘り下げ余地があるように思われる。具体的な例として、聴覚リズムと視覚リズムの関係についての議論があるのに暗唱のリズムと黙読のリズムとが区別されていない点については今後の説明が待たせる。

総じて、本書は新詩リズムに関する理論体系と解釈の基盤を構築しようとするものであり、実践的意義を有するとともに近年の新詩のオントロジー研究における重要な成果であると言える。今後、リズムに関する議論がさらに活発化し、新詩研究にヒントと示唆をもたらすことを期待している。

注

- (一) 王雪松『節奏与中国現代詩歌』、中国社会科学出版社、二〇二二、三六頁。
- (二) 「節奏也就是一定間隔里的某种重复」卞之琳『徐志摩詩集・序』、四川人民出版社、一九八一年、二頁。
- (三) 「節奏是在一定時間間隔里的某种形式的反復」陳本益『漢語詩歌的節奏』、重慶大学出版社、二〇一三年、四頁。

(きょうあねい・神戸大学大学院博士課程後期課程)